
運命なんて怖くない！

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命なんて怖くない！

【Nコード】

N8545W

【作者名】

ヒロユキ

【あらすじ】

今回の更新は金曜日の予定です。「なあ、お嬢ちゃん。あんた、おれっちの巫女になってくれよ」夏休み、家族旅行で訪れたとある町の神社で、大阪弁の天然少女、青山椿は奇妙な神様、ミカヅチと出会う。その神は、神の消えたこの町の新たな守護者となるために、椿の力が必要なのだと言う。困った人を放っておけない椿はミカヅチの願いを聞き入れ、町で偶然再会した幼なじみの少年、小賀玉白路と共に、土地の力を集める儀式を行うため、真夏の町を駆け抜けることになる。しかし、そこには思わぬカラクリがあり……。神に

見放された町、神霧瀬町。^{かみつせ}そこで繰り広げられる運命的な物語を少女の純真無垢なる瞳が映しだす。ちよつとハイテンションでミステリアス、ぎゅぎゅぎゅーとマイペースな神様ファンタジー！

ブローグ 少女の瞳 ー Pray ー (前書き)

どうも、初めましての方は初めまして。他作品から引き続きお読み頂いている方は、また改めまして、よろしく願います。作者のヒロユキというものです。

この度はこのような珍奇な僕作品にご興味頂きありがとうございます。ご期待に添える作品になるか分かりませんが、精一杯努力しようと思しますので、どうかよろしく願います。

さて、ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、この作品は『天罰なんて怖くない!』の続編に当たる物語です。そのため、前作をお読み頂いていた方が、この作品をより楽しめるのではないかと思います。

しかし、未読の方でも無理なくお読みいただけるよう、前作との物語上の繋がりはない設定(前作に登場したキャラクターは登場しますが)で執筆していく予定です、ご安心下さい。

ブローグ 少女の瞳 ｝ P r a y ｝

ああ、神様。

どうか、神様。

うちは祈ります。

膝をついて、部屋の窓から、夜空に向けて、

うちは祈りを捧げます。

遠い遠い、お空の上、

もっと遠い、お星様の上にいる神様へ。

うちのお願い、聞いてください。

うちには、今、好きな人がいます。

とてもとても優しくて、大好きな人です。

毎日でもお話しして、お散歩して、一緒に手をつないでいたい人です。

うちがその人のことを想うと、いつもぽあぽあした気持ちになって、ぽーっとして、ほっぺが温かくなってきました。

それくらいに、好きなのです。

あの、ぽあぽあ、というのは変ですか？

うちが友達にそのことを話すと、なんやそれ、変なのー、と言って笑われました。

そんなにおかしいことなのでしょう。

でも、本当にうちはぽあぽあしてしまうのです。ぽあぽあは、ぽあぽあなのです。

と、それはさておき、お願いします。

実はうちが好きなその人は今、別の町にいます。

遠い、遠い、別の町へ引っ越してしまったのです。

先週の土曜日に車に乗って行ってしまいました。

その日は、ざあざあとした冷たい雨が降っている日で、その人はとても悲しい顔をして俯いたまま、「じゃあね、さよなら」とだけ言い残して、行ってしまいました。

前にその人が話していた事には、もうきつと会えない、とのことでした。

そう言われた時には、とても驚いて、うちは何も言えなくなりました。その時にはまだ気がついていませんでしたが、うちはそのずっと前から、その人のことを好きなのでした。

もしも……もしも、それに気づいていれば、あの時、うちは……。

お願いです、神様。

どうか、うちとその人を会わせてください。

もう一度でもいいのです。どうしても、その人に会いたいです。

一言、心のそこから、「大好き」と言いたいです。

どうか、お願いします。

ああ、神様。

突然、暗い部屋の明かりがパツと灯りました。

ベッドの上で跪いていたうちは、驚いて振り返ります。乙女の純粹な祈りの邪魔をするのは何者なのか、その正体を見極めようと思っただけですが、そこにいたのは、暗い部屋で一人、ぶつぶつと呟く幼い娘の姿を心配している母親の姿でした。

「椿、まだ起きてるん？」

と頭をくしゃくしゃしながら、お母さんは寝ぼけた目で、ふらふらとうちのベッドに歩いてきます。

そして、ぼふん、とうちの隣に座ると、窓際にいるうちをひよいと事もなく抱えて、膝の上に、これまた、ぼすん、と乗せました。

「ええ子は早う寝なあかんで」

そう言いながらうちの頭を優しくなでなでとってきます。
なでなで、なでなで……。

ちよつとやり過ぎでくすぐったいくらいです。

「そ、そやけどな、お母さん」

と、うちはその手をどけながら、言い返します。

「うん？」

「うちなー、今、神様をお願いしててん」

お母さんは目をぱちぱちとさせました。

「かみさま？」

「せや。か、み、さ、ま」

「ふーん。それで、椿は今まで眠らずにベッドの上におったいうわけや」

「うん」

こくり、とうちは頷きました。それはそれは眠ることよりも大切なお願いだっただのです。だって、それはうちの好きな人への……。

「あ、せやー！」

うちはそこであることに気がついて、顔を上げます。

「なんやの？」

驚いたお母さんが上から覗き込んできました。

「急に元気な声なんかだして」

「なあなあ、お母さんなら、神様の声が聞こえるんちゃうん？」

「神様の声？」

「せや、大人になったらいろんな人と知り合えるんやろ。この前やつて、サンタさんと知り合いやつてお母さん言うてたし」

「あ、ああ、そんなことも言ったかなー……」

「それやつたら、お母さん。神様とも知り合いなんちゃうん？ お話、できへんの？」

すると、それを聞くと、お母さんは目を丸くして、いきなり、ふふ、と笑い始めました。

「我が娘ながら、ほんまに椿はおもいこと聞くなー」

「ねえねえ、聞こえへんの？」

「ふふふ、そうやなー」

口を押さえて笑いを堪えながら、

「もちろんわかるで、なんちゅうても椿の母さんやからな」

と自信たつぷりにお母さんは胸を叩きました。

「え、ほんまに！？」

「ところで、椿は神様にどんなことをお願いしたんや？」

そこで、うちは、先ほど神様に祈ったことをそっくりそのままお母さんに教えました。少し恥ずかしかったですが、これも願いを叶

えるためです。ちょっとくらいのことは我慢します。

うちのその祈りをお母さんは妙に興味深そうにいちいちリアクシヨンを取りながら聞いていました。

そうして聞き終わって……。

「そうかそうか、椿には好きな人がおつたんやね」

としみじみと頷きました。

「我が娘もずいぶん成長したもんやなー」

「……成長？」

よく意味が分かりません。

「ともかく、今はその人、引越してしもうたからなー」

「うん、それは大変やな。会えへんというのは、一番悲しいことや」

今度は深々と頷いて、そこでお母さんはぱちんと手を鳴らします。

「よっしゃ、そういうことならお母さん引き受けたで」

「え、ほんまに？」

「可愛い娘の願い事を聞いて放つたらかしにはできへんやろ。よう見とき。母さんが神様と話したる」

そして、いきなりお母さんは目と目の間に指を置いて、難しそう
な顔をしたと思うと、

「うーん、ピピピピッ」

おまじないをするようにそう言いました。

「うーん、ほうほう、椿は……そうか、なるほどなー」

どうやら、神様との通信に成功したようです。うちは、ずいぶんお手軽なんやなー、となんとなく思いましたが、とにかく、神様のお返事の方が気になります。

「なあなあ、神様はなんて言ってるん？」

「うーん、それはな……」

そして、すっとお母さんは息を止めて、優しくこう言いました。

「大丈夫。問題ないで。いつか必ずその子と椿はまた会える」

「え!？」

「何しろ、それは神様の『運命』で決まってることやからな。間違いないで」

「やった、やったー!」

嬉しさのあまり、うちは思わず、その場で飛び跳ねました。これはベッドで寝てなんかいられません。今からでもパーティーをしたい気持ちになります。

しかし、あまり調子に乗りすぎたのか、お母さんの足を踏んでしまい、怒られてしまいました。何事も、やり過ぎには注意が必要です。

それから、しばらくして。

「椿、あんたに言うとかくことがある」

急にお母さんが言いました。

「何？」

お母さんの膝の上で寝転んで遊んでいたうちは顔を上げました。

「椿、あんたが一番得意やと思うもんを伸ばしなさい」
「え？」

いきなりだったので、うちは面食らいました。

「得意なもん？」
「そうや、なんか一つくらいあるやろ？」

そう言われて、うちは少しだけ黙って、考え込みます。うちの得意なこと、得意なこと、何かあるやろか。

「そや、この前先生にうちお裁縫が上手やって褒められたんやった」
「裁縫かー。そやな、椿は手先が器用やしな」

するとお母さんは、うちの小さな手握って、ふにふにと揉んできました。じっと見つめてから、また揉みます。くすぐったくてたまりません。

「じゃあ、頑張ってお裁縫を上手になつて、次にその子に会う時に驚かしてしまい。そうしたらその子も椿の魅力にイチコロや」
「イチコロ？」

それは一体どういう意味でしょう。

「そうや、イチコロのイチコロころりんや」
「ふふ、なんやのそれ、ころりんって、ふふ。イチコロころりんか

「。それはすごいやん」

うちは何だかおかしくなって笑いました。けらけらとお腹を抱えて笑い転げます。しかし、お母さんはまだ真面目な目でうちを見ていました。そして、急にうちのことをぎゅっと背中から抱きしめると、

「椿」

とすぐ耳元で名前を呼んできました。お母さんの息が耳の産毛を触ります。

同時に、お母さんの優しい香りがふわふわと漂ってきます。うちはその香りが大好きで、それを鼻から吸い込むとともに幸せな気持ちになりました。

「何、お母さん」

「椿、あんたはな、誰よりも綺麗な瞳をした子や」

「綺麗な目？」

「そうや。誰よりも、物事を素直に、真っ直ぐに受け止めることが出来る力がある。いつもにこにこできるし、皆に優しい。それはな、とても大事なことや。皆が出来ることとはちゃう」

「……」

何だか、妙にお母さんが真剣で、うちは思わず口を閉じてしまいました。

「ふふ、お母さんが保証したるで。あんたはええ子やから、大きくなったら別嬪^{べっぴん}さんになる。周りの男が放つとかんくらいに、な」

せやから、早う寝ること。美人に夜更かしは大敵やで。

そう言い残して、お母さんは部屋を出ていってしまいました。後には、ベッドに座ったままのうかがばつんと残されます。

綺麗な瞳……。

どういう意味やろ。

それはうちにとっては謎の言葉でした。

もしかしたら、お母さん。

お空のお星様が、うちの目に映って見えたんかな。

ふとそんなことを思いました。

第一章 運命は雨の匂い 1

ととん、たたん、ととん、たたん。

移動中の列車のもたらす規則的な揺れの中で、うちは目を覚ましました。

薄ぼんやりとした意識の中で、見えない透明な光のアーチをくぐって行ったような、不思議な感覚がしました。ふわりと体が浮いて、別の空間に飛び移ったような気がします。

うちは、どうやら、窓側の席に座って、肘掛けに寄りかかるような格好で、眠っていたようでした。

車窓からは真夏の光がきらきらと溢れ、ガタガタと揺れるその窓枠の隙間からは、濃厚な夏の青い匂いが滲み出しています。

「う、うん……」

態勢を元に戻しつつ、大きく伸びをして、深呼吸をしてみました。体の筋肉固まっている辺り、どうやら、ずいぶん長いこと眠っていたようです。

すると、向かい合った席に座っていたお母さんが薄目を開けてうちを見ているのに気が付きました。

「うんにゃ、ようやく目が覚めたみたいやな」

と、だるそうにあくびをします。くしゃりと前髪が濡れているのを見るに、お母さんも一緒に眠っていたようでした。

「なんか、夢でも見てたん？」

そう聞くので、うちは頭に手を当てて、つい先程の記憶を思い出してみます。

しかし、生憎ながら、夢というものは不安定なようで、うちはその内容をほとんど思い出すことはできません。

「ええと、なんか懐かしい夢やったのは分かるんやけど」

それも、とても、大切な夢やったような……。

「あ、お母さんもおった気がするで」

そう言つと、お母さんはにっこり笑いました。

「なるほどな。椿が眠りながら嬉しそうな顔してたんは、お母さんと一緒にったからやな」

そして、座席からぐつと前のめりになったと思うと、手を伸ばしてうちの頭をうりうりと撫でてきました。

「もう、ほんまにかわええ子やな」

昔からお母さんはそうやって何か事あるごとにうちの頭を撫でます。癖、と言つてもいいくらいです。よほどうちの頭は撫で撫でに適している良い頭なのでしょうか。うちにはよく分かりません。

でも、それはそれです。

さすがにうちももう大学生、頭を撫でられるのにはさすがに抵抗があります。いつまでも子供とはちゃうのです。

なので、うちは丁重にお母さんの撫で撫でを断りました。

「ええ、もうちょっとだけ」

と名残惜しそうにしているお母さんを無視して、窓の外に視線を移します。

すると、そこである異変に気が付きました。

「うわー、なんか雨が降りそうやなー」

つい先程までの明るい日差しはどこへやら、がたごとと列車の速度に合わせて流れる空の色は、なんともどんよりとしたものになっていました。黒ずんだ水に浸した綿のような色で、何とも言えない不安感があります。

そして、それに合わせて、どこからか、ゴロゴロと鼓膜を震わす雷の音まで聞こえてきました。

まるで、急に別世界に入り込んだみたいや……。

「この雲色。うーん、何か起こりそうな予感やな」

不安げにお母さんはそう言つと、顎の辺りを指で撫でました。まるで不可解な謎に行き当たった探偵のようです。

「天気が悪そうなのは、ちょうどこちらが向かってる町の方角みたいやし……」

「大雨？」

「に、なるかもなー」

「洪水？」

「うん、ありえるなー」

「雷で山火事とか」

「ふふ、そうやったらどないする？」

窓の外に目をやりながら、お母さんは聞きました。うちは少し悩

んで、こう言います。

「……神様」

「……？」

「そうなたら、空の神様にお願いするかな」

「神様に？」

ふふ、とお母さんは吹き出しました。

「椿はほんまに昔から神様が好きやな」

「あ、お母さん今馬鹿にした目になったやろ。あかんで、神様はほんまにおるんや。悪いことしたら天罰が当たるんやで」

「ほお、そら怖いな」

言いながらも、お母さんはどこか他人事です。うちの言葉を面白がっているようにも見えます。

むっとしながらも、うちは続けました。

「ともかく、うちはその神様に雲をどけてもらうように頼む。そうすれば、万事解決や。きっと旅行中の天気は毎日快晴になるで」

ほんと、自信を持って胸を叩くと、お母さんは唇をへの字にして、うんざりするような顔になりました。

「毎日快晴かー。そら、ちっと暑そうやな」

「毎日雨でどこにも行けへんよりはまだマシやろ。せっかくの『旅行』やのに」

そうなのです。

うちらがこの列車に乗っている理由。

それは、年に一度の家族旅行中であるためなのです。

これは、うちが幼い頃から続いている家族の行事で、大抵三日か四日くらいの期間で、日本の様々な場所に観光にでかけます。

海のきれいな場所に行ったり、山登りをしたり、動物園に行ったりと、なかなか盛りだくさんな旅です。

うちはそれが毎年の楽しみで、今年だって、一週間前からろくに眠れませんでした。

それだけ待ち遠しく思っていた旅行なのですから、運悪く雨ですつとどこにもいけない、という事態は何としても防ぎたいものなのです。

「ところで、お父さんは？」

ふいに気になってうちは周囲を見回しました。

眠る前まで、お母さんの隣に座っているはずのお父さんの姿が見えなかったのです。

一体、どこにいつてしまったのでしょうか。

すると、お母さんが背後の方を振り向きながら、「喫煙車やないの？」と言いました。

「あれ、タバコでも吸いに行ったん？」

「うん。ここじゃゆっくり寝られへんとか言っつて、ぷりぷり怒つてな」

「……？ どういうこと？」

意味がわからずに問いかけると、にひひ、とお母さんは意地悪な笑みを浮かべました。

「実はな、おとんが眠りかけるたんびに、くすぐったり、冷えたジュース缶をひつつけたりして、驚かして遊んでたんや」

うちはそれだけですぐにここで起きた事態を把握しました。これではお父さんが出て行くのも無理はありません。

呆れた目でお母さんを睨みます。

「お母さん」

「そ、そんな目で見んといて、椿。ほら、なんちゅうか、ほんの出来心やねん」

「出来心？」

「そうそう、旅行に来たら、なんとなくはしゃぎたくなることってあるやん？」

「……まあ、それは分かるけど」

現にうちも、旅行に行く前は興奮して眠れへんかったわけやし。

しかし、それでも、少し調子に乗り過ぎな気がします。

お母さんもいい大人なのだから、その辺は限度というものがあるのを知るべきです。全く、お母さんのこういう無邪気なところは時に問題を起こすのです。

「とにかく、お父さんに謝りに行く」

「ええ、面倒臭いやん」

「でも、二人が喧嘩してたらせつかくの旅行が台なしや」

そう言って、うちが立ち上がってお母さんの手を引っ張ったときでした。

ピンポン。

伸びやかなベルの音が車内に響きました。うちははっとなって立ち止まります。

どうやら、アナウンスが入ったようです。急に列車のスピードが落ちてきたのも感じます。

『まもなく、神霧瀬、神霧瀬……』

それが、うちの目的地の名でした。

第一章 運命は雨の匂い 2

列車が駅のホームにゆっくりと停車し、自動ドアが開くと、うちは乗客の誰よりも先に外へ飛び出しました。

「ここが神霧瀬町！」
かみうせ

そう叫んで、その場でくるりと一回転をします。

うちの胸は今、はちきれんばかりにドキドキしていました。

何しろ、うちが生まれて初めて訪れた町なのです。興奮しないでくれ、という方が無理な相談です。うちの目に映るもの、肌で感じるもの、耳から聞こえるもの、全てが新鮮な気がして、うちの心のセンサーがビンビンに反応しているのが分かりました。ぎゅんぎゅんと胸の中のエンジンが回転する音が聞こえます。

しかし、神霧瀬町の駅はうちの楽しい気分とは裏腹に、どこか寂しげな雰囲気が漂っていました。

それも無理はありません。

何しろ、駅の外に広がる空模様が、

「雨やもんなー」

そうです。

先ほど列車の窓からこちらの町の方角に黒い雨雲が立ち込めているのが見えましたが、どうやらこちらが到着すると同時に降りだしてしまっただけなのです。

そのためか、駅にまばらに來ている人たちもその手に傘を持っています。

しかし、うちはそれくらいではめげません。

「お母さん、折りたたみ傘の出番や！」

と一声上げると、お母さんが「このまますぐにタクシーで旅館に行くんやで？」というのも聞かずにカバンから傘を取り出していました。

ぱちりと留め金を外して傘を広げ、まだ屋根のある駅のホームにいるというのに、うちは嬉しくなって、頭の上でくるくると回しました。

綺麗に描かれた椿の花の絵が綺麗に咲き誇っています。

「うんうん。やっぱりうちにぴったりのサイズやな」

そう納得して、周囲からおかしな目で見られるのも気にせず、切符を持って改札口を抜けました。

愛想のいい駅員さんに手を振って、駅の出口まで来ると、雨の匂いに混じって、いよいよ夏の青い匂いが肺に充満していくのが分かりました。

うちの胸のドキドキは最高潮に達しています。

そして、うちは何を思ったのか、そこでその気持ちを表現するために、つい、

「やっほー!!」

と駅の入り口で叫んでしまいました。

いやはや、お恥ずかしい限りです。

うちも、言った後になって、その行動のあまりの幼稚さに気が付きました。これではまるで道端ではしゃぐ小学生ではないですか。

いくら嬉しくても、自分の感情を抑えられるだけの制御能力というのを身につけなければなりません。

うちはその後、赤面しながら無駄に高揚してしまった気持ちをどうするべきか悩み、しばらく、そう叫んだポーズのままでいたが、ふいに、誰かの気配に気が付きました。

駅の入り口の右手、障害者用のスロープを降りた先にあるベンチに、誰かが座っているのです。

うちが振り向くと、その人物と目が合いました。どうやら、少年のようです。

彼は駅の軒下のその古びたベンチに座り、ぼんやりと雨が止むのを待っていたようでした。しかし、そこにあまりにも場違いなことを叫んだうちに驚いて、こちらを見ていたのです。

そう、じつと。

穴が開くほど、じつくりと。

そして、そんな少年をうちも負けじと見つめ返します。

目を、大きく見開いて。

呼吸することさえ、忘れて。

「嘘、だろ……」

しばらくして彼がつぶやいたその言葉は、別にうちが駅のホームで妙なことを叫んだことに対して、呆れているわけではありませんでした。

彼の目はまるで、ありえないものを見ているかのようにうちを凝視して、離れませんでした。しばらくして、彼の震える唇が、ゆっくりに言葉を発します。

「椿、ちゃんなのか？」

恐る恐る、確かめるように……。

「あの、青山、椿ちゃんか？」

そう問われて、うちもやっぱり、と胸の鼓動がさらに高まります。なぜなら、うちは、その少年のことを以前からよく知っていることを思い出したのです。

急な濁流に飲み込まれるように、一気に過去の記憶が舞い戻ってきます。頭の中で懐かしい匂いをした引き出しが開き、走馬灯のように、様々な風景が見えました。

「あ、あ、あ……」

知らず、口が開いて、言葉にならない声が漏れ出ていました。そうか、夢やないんや。

うちは小さな頃、仲が良かったこの人と、離れ離れになって。気がつけば、手に持っていた傘をうちは地面に落としてしまっていました。雨がさわさわと優しく撫でるように、うちの頬を濡らしています。

「シロちゃん……」

うちは、宝物を抱きしめるように、彼を呼びました。

「……今日は、雨降りやね」

彼が、小さく笑って頷きました。

「
ああ、
そうだな
」

第一章 運命は雨の匂い 3

父親の転勤の影響で引越しかりの生活だった僕には、幼少時、友達と言える存在が一人もいなかった。

早ければ半年、長くても一年ほどで学校を転校していたのだから、無理もない。大概、新しい学校に連れてこられても、友人を作るほど親しくなる前にそのクラスメイトと別れてしまうか、友達になっても、ろくに付き合いもないうちに送別会になってしまうのが関の山だった。

僕がずいぶん成長するまで他人とろくにコミュニケーションを取ることが出来なかったのも、そのせいだった。いつだって人見知りで、他人と会うと一歩退いて話をしてしまう癖はなかなか治らなかった。

僕はただただ、他人と付き合うことが怖かったのだ。

なぜなら、他人と付き合い合っても、どうせすぐにまた別れなくてはならないから。それを幼いながらに僕は本能的に悟っていて、いつしか、僕の体は他人に近づくことを無意識に拒否するようになっていた。

必要以上に他人に近づくな。親しくなるな。頼ったり、頼られたりするな。

そう語りかけてくる心の声を僕は眼を閉じていつも感じていた。もしも、他人と関わり過ぎてしまうと、別れる時が辛いから。辛くて、辛くて、悲しいから。

けれど、物事にはいつだって例外がある。とある小学校で出会った、あの無邪気な瞳をした少女だけは、違った。

まるで僕は重力で引き寄せられるように、気がつけば、自然に彼女に近づいていたのだ。天真爛漫で、天使のような笑みを見せる、あの少女に。

僕は彼女と出会った日のことを今でも鮮明に覚えている。

あれは、雨がしとしとと降る七月のことだった。

あの日、僕はまたしても父の転勤によって新たに訪れた町の学校に初めて顔を出すことになっていた。

母親に連れられ、見慣れない校門をくぐった時の、あの憂鬱な気持ちを含めて僕は憶えている。

またしても、無意味で退屈な新生活が始まると思うと、うんざりした気分だったのだ。

案の定、朝のホームルームで先生に紹介され、教室のドアをくぐった時の、あの刺さるような興味の視線は、僕をいきなり萎えさせた。

整列した机の上で、新たな出会いに期待する輝く瞳たち。

期待するな、と僕は思う。

僕に期待なんてするなよ！

僕も、お前たちに期待なんてしてないんだから……。

最初に教師が僕の話をして、その後、僕に自己紹介を促した。それはこれまで通ってきたいくつもの学校と同じ流れだった。

僕はため息を吐き出すように、はいと小さく返事をし、以前から幾度となく使ってきた感情のこもらない無味乾燥とした言葉でクラスメイトに挨拶をした。

まばらな拍手が起こった気がする。正直、僕にとってはそんなことどうでもよかった。

ちらりと周囲に目を向けると、何人かの生徒はこれからこの集団の新たな一員となる僕にかなり興味を示しているようだった。しかし、僕がまるで不貞腐れたかのような顔で自分の席に座ると、彼らは困惑したように顔を見合わせているのが分かった。

その当時の僕は、転校した場所ではそうしていることが一番利口だと思っていた。見ず知らずの転校生というだけで周囲の人間には話しづらい空気があるのに、その転校生があからさまに不機嫌そうな顔をしていれば、尚更近寄り難いものだ。

そうすることで、友達になる最初のきっかけの芽を潰そうとしていたのである。

「何だ、あいつ」

「ちよつと怖いよね」

僕なんて、それくらいに思われているのがちよつどいいのだ。そう思わせておけば、自然とクラスメイトたちが自分と関わろうとする気も失せて、勝手に距離を取ってくれるようになるのである。

案の定、そのクラスでも僕の目論見通り、僕の自己紹介が終わった後、僕に話しかけてくるクラスメイトはいなかった。

そうだ、それでいい。机に顔を伏せながら、そう僕は思っていた。友達なんて作らなくたって学校生活はやっていける。クラスで目立たないように適度に学び、忘れ物をしないよう注意し、揉め事を起こさない。これくらいの要点を守っておけば、学校の時間など勝手に過ぎ去ってくれていくのである。

もしも、何かの『事故』で迂闊に友達なんて作ってしまえば、それは悲劇だ。

僕は今までの人生の中で何度もその悲劇に遭遇してきた。仲がよい友だちと別れることがあれほどに切なく苦しいものだという事を

否が応にも知っていた。

あんなに毎日楽しく遊んでいたのに、あんなに大事な仲間だったのに、その繋がりがいきなり断ち切られて、僕だけ無理やり別の場所に連れていかれてしまうのだ。

僕はよく仲が良かった昔の友達のことを思い出す。もしも、また会いに行けば、果たして彼らはまた以前と同じように僕と遊んでくれるのだろうか、と違って切なくなる。

そして、同時に、彼らも会えなくなった僕のことを思ってくれることはあるのだろうか、と思う。まだ、この僕を覚えてくれているだろうか。

いや、もしかして、今頃自分のことなど全て忘れて暮らしているのではないか。

そう思うと、怖くなる。眠れなくなる。

いつかかけがえのない自分がいるはずだった、仲間たちのスペースがいつの間にか消えてなくなり、自分だけが幽霊のような亡霊のような存在になってしまふことが怖かった。存在が消えていくようで、とてつもなく怖かった。

だから、だから、もう！

最初から友達なんて作らない。

僕はそう心に強く刻み、強く誓っていたのだ。

そして、この敵意が、と僕は思う。

この身から出す、この敵意こそが、僕自身の心を何よりも守るのだ。

チャイムが鳴り、ホームルームが終わった。児童たちがばらばらと席を立ち、雑談を始める。僕はそんな彼らを見無視して、一時間目の授業の準備をしようとした時だった。

いきなり、ガラリと教室のドアが開いたのだ。

「おっはよーございまーす!!」

まるで校庭中に響き渡らせるような挨拶だった。

さすがの僕も驚いて、挨拶をしたその人物に目を向けた。

教室のドアには小柄な少女が立っていた。目玉がくりくりとした可愛らしい女の子で、ふわふわとした桃色のフリルのついた服を着ている。

もしかして、遅刻したのだろうか、と僕は思ったが、彼女が悪びれず、あまりにも堂々とした様子で教室に入ってきたのを見て、一瞬混乱してしまった。

何なんだ、こいつ。

それを見ていた教師も一瞬固まっていたようだが、すぐに教室の時計に目をやって、立ち上がると、彼女の方へ歩き出した。おそらく、遅刻してきた彼女を叱ろうとしたのだろう。

しかし、その少女は何食わぬ顔で教師の脇をすり抜けると、瞳をきらきらさせながら、なんと、僕の方へ向かってきた。

しばし、我を忘れていた僕だったが、それを見てすぐに気を取り直し、机に突っ伏す。彼女に容易に会話のチャンスを与えてはいけない。

どんな場合でも親しくなるきっかけを与えるわけにはいかないのだ。

「ああ、転校生の子や!」

はしゃいだ声が耳元で聞こえた。

しかし、僕は無視をする。

「ねえねえ、うち、青山椿いうねん」

ああ、無視無視。

「これから同じクラスメイトやな。仲良うしてなー」

聞こえない聞こえない。

「今日は雨降りやね、傘、持ってきた？」

何ら答える必要はないな。

僕は心に念じる。

僕はただそうしているだけでいいのだ。そうしていれば、どうせこいつも僕の反応がないことに飽きてそのうち自分の席に戻るだろう。

しかし、彼女の気配はなかなかいなくなるらない。いったい何をしているのだろうか。

じっとしていると、ふいに、

「こ、こ……たま？」

その少女が自分の耳元の傍で何かを言っているのが分かった。

「うーん、わからへん。これ、何て読むの？」

ああ、なるほど。

僕は顔を伏せつつ、彼女が何をしているのかを理解する。どうやら彼女は教師が僕の机に貼り付けられた僕の名札を読もうとしているようだ。「小賀玉白路^{おがたまはくじ}」と教師らしい綺麗な文字で書いてある。おそらく、僕がすぐにクラスメイトに名前を覚えてもらえるようにそうしたのだろうか、それならばせめてフリガナくらいふってやれ

ばいいのに。

「まあええわ。苗字は後からのお楽しみにしとく」

「……」

お楽しみつて。暢気そうに言いやがつて。

しかし、この気持ちは何だろう、無性に突っ込みたくなるな。

「名前は、と……あ、うち、この漢字知ってるで！」

すると急にバシバシと肩を叩かれる。

どうやら、この少女が興奮して叩いているようだ。

いい加減、うっとおしいな。僕は心の中で舌打ちする。

「し、『しろ』って読むんやろこの漢字」

「……」

「そっか、転校生のお名前はしろって言っんやな」

それは白は白でも『はく』って、読むんだよ。思わず、そう言いそうになるのを僕は堪える。

「しろ、しろ、ふふ、シロちゃんやね。よろしくな、シロちゃん」

馴れ馴れしく肩を叩くな。それに、僕の名前は、はくじ、だ。しろじゃない。

「あれ、シロちゃん？ どしたん、気分でも悪いん？」

「……」

「なあ、先生呼んで来る？ うちが行ってもいいで、シロちゃん」

「ち、ち、ち……」

「え？ 血が出てんの？ それは大変やん！」
「違う！！」

思わず、僕は席から立ち上がってそう叫んでいた。思い切り叩いた机がガタガタと揺れる。

「僕の名前は白路だ！」

「え？」

「その、青山とか言ったか、このやろつ。僕の名前を間違えるんじゃないえよ。僕の名前は、小賀玉白路だ！！」

ビイーン、と教室に音が響くのが分かる。クラスメイトたちが全員、絶句しているのを感じた。まずい、目立ってしまった。

おずおずと目の前の少女に眼をやる。

これだけ大きな声で怒鳴ってやったのだ。さぞかし、恐怖にひきつった表情をしているかと思いきや、彼女はなんと。

にこやかに、まるで、天使のように、微笑んでいた。

「そっかー、白路君か」

「え？」

そして、彼女は中途半端に浮いてしまった僕の片手をぎゅっと掴む。どうやら、僕は握手をしているらしい。

「えへへ、これからよろしくなー」

しまった、『きっかけ』を与えてしまった。
そう思ったときには、もう遅かった。

第一章 運命は雨の匂い 4

駅のベンチで僕達が雨宿りをしているうちに、雨は小降りになり、対して時間もかからないうちに上がってしまったようだった。

僅かばかりの太陽の光が雲間から溢れ、濡れた町を照らし出している。辺りに漂っていた雨の匂いが風によって流されていった。

しかし、その風は、僕の高鳴った胸の鼓動を静めてはくれなかった。どくん、どくん、とそれは何かを急いでいるように拍動している。

砂に埋れて風化しかけた時計が、忘れられていた時を取り戻すかのように猛烈なスピードで針を回転させているのだ、と直感的に僕は思った。

なんだか、軽く目眩がしそうだ。

そう察知して、少しでも気を落ち着けるためにふっと息を吐くと、隣の彼女を見た。

「それで？ いいのかよ、僕と一緒になんかいて」

何だか、直視していらなくて、言いながら、僕の視線は再び彼女を離れ、遠くの空を見た。仲間とはぐれて孤立したような、ぼつんとした雨雲が漂っている。

「親はもう旅館に行ったんだろ？」

すると、椿は、へへ、と笑って片手を振ったようだった。

「かまへん、かまへん。せっかく久しぶりに会ったんやから、お母さんが一緒に遊びなさいー、って言っただくらいやし」

そうして、彼女は上機嫌そうに鼻歌を歌い出した。ちらりと横目を向けると、ベンチの上で子供っぽく足をぶらつかせている。

そんな彼女を見て、僕は椿が昔と変わっていないことを確認した。以前から、彼女はこんな風だった。僕といるときはいつだって、楽しそうで、笑顔で、不機嫌になることなんてない。まるで年中彼女の周りだけが春の陽気にでも包まれているかのように見えたものだ。

可愛くて、優しくて、まるで、羽が生えている天使のよう。

そうだ。

彼女は、確かに存在していたんだな。

僕は確信する。

決して、決して、寂しかったあの当時の僕が創りだした妄想なんかじゃなかったんだ。そう思うと、ほんと安堵すると共に、この上なく嬉しくなった。

しかし、それと同時に、足元がグズグズと溶け出すような疑念が顔を出す。

果たして、本当にこれは現実なのだろうか、自分が見ている夢か何かではないだろうか。

その可能性は十分にあった。

この広い世界中で、僕がこんなにも偶然、彼女と運命的に再会することなどありえない気がする。何だか、嘘みたいだ。

もしも、本当に夢なのだとしたら、どうすればそれを確認出来るだろう。頬を指で抓る、とか。ベタだが、やってみる価値はあるだろうか。

そんなことを悩んでいると、いきなり、ふにっと頬に何かが触れた。はっとして振り向くと、椿が不思議そうな顔で僕の頬を指でついていたのだった。

「うわっ！」

僕は思わずのけぞった。

「驚いた？」

「な、何を？」

「だって、シロちゃん、うちが話しかけても全然返事してくれへんやん。なんか難しそうな顔してぼうつとしてるし」

せやから、ちょっといたずらしてみたんや。彼女はそう言って、ふふふ、と笑う。

僕はそんな彼女を見ながら、同時に、彼女の指が触れた頬に手を当てていた。

今、確かに、触った、よな。彼女の柔らかい指先が。その感触が僕にこれが夢ではなく現実であることを告げていた。

「シロ、ちゃん。どうしたん、もしかして怒った？」

「いや、そういうんじゃないよ。ただ、信じられなくて」

「……？」

「ああ、ええと、何でもない。ちよつとぼーとしてたんだ。気にしないで」

そうごまかした僕を彼女はしばらく不思議そうに見ていたが、急に何かを思いついたように指を鳴らした。

「ああ、せや！」

「な、何だよ」

「折角、こうして偶然会えたんやから、携帯のアドレス交換しよー」

「アドレス交換？」

「うん。それがあつたら、これからも連絡取れるやろ」

そして、僕の返事も聞くことすらせずに、出して出して、と彼女は僕の携帯をせがむ。言いながら、ぐいぐいと隣から彼女が寄ってくるので、僕は動揺しながらも、ポケットから携帯を出して手渡した。

「こ、これでいいのか？」

「ほお、この黒い携帯、かっこええな」

すると、物珍しそうに、椿はそれを手の上でじろじろと観察した。

「でも、シロちゃんやのに、黒い携帯かー。ちょっと変やなー」

「余計なお世話だし、それに俺はシロちゃんじゃねえって」

しかし、僕がそう指摘したのも聞こえていないのか、彼女は早速、携帯の液晶画面を睨みつつ、ボタンをいじくり始めていた。真剣な表情で一つ一つを確認しながら作業をしている。

そんな無防備な彼女の横顔を見ると、またドキドキしてきたので、僕は無理やり反対の方向を向いた。空っぽになったポケットに手を入れ、もやもやした気持ちに蓋をする。

第一章 運命は雨の匂い 5

「なあ、シロちゃん」

しばらくして、携帯電話のプッシュ音が止んだと思うと、急に、彼女が話しかけてきた。相変わらずののんびりした口調だ。どうやら、アドレスの登録は終わったらしい。

「そういえば、何でシロちゃんはこの町におるんや？」
「あれ？」

僕は思わず間の抜けた声を出して、頭を掻いた。あまりにも唐突に聞かれて拍子抜けしてしまったのだ。

「説明、してなかったっけ？」
「してへんよ。シロちゃんさっきからぼけーっとしてばっかやし」

ほんまに、もう、と彼女は頬を膨らませる。

「せっかく再会したのに、うちのことはどうでもええん？」
「まさか、そんなわけないって」

僕は慌てて首を振る。

「椿ちゃんのこととは今までずっと忘れたことなんて……」
「え、ずっと？」

瞬間、彼女の額に怪訝そうに眉が寄る。僕はしまったと口を押さえた。思わず余計なことを口走ってしまった。

「うわ、何でも無い何でも無い。とにかく、俺の話だったよな」

すると、彼女は明らかに納得していなかったようだが、一先ず、頷いてくれた。

「あ……うん」

僕はほつと安堵する。

危ないところだった。まさか、会えなくなつてから、ずっと彼女の事を想い続けてたなんてこと、言えるわけがないよな。

「実は僕、今はこの町に住んでるんだよ。以前までは父さんが転勤の多い仕事してたけど、なんだかんだで辞めちまつて、今ではこの町で別の仕事してる。そのお陰で転勤もなくなったし、ようやく腰を落ち着けて定住できるようになったってわけ。まあ、そうは言っても、まだ一年くらいだから、ここの生活に慣れてきたぐらいだけどな」

「じゃあ、これからはずっとこの神霧瀬町におるん？」

僕は軽く頷いて答える。

「そうなるだろうな。中々いい町だよ、ここは。都会みたいにゴミゴミしてないし、静かで、住んでる人も穏やかだ。転勤ばかりの時には、こういう風にゆったりした気分にはなれなかったけど、今は充実してる。まあ、ちょっと田舎で多少不便なところはあるけれど……ああ、そういえば、家から大学が近いのは便利だな」

「へえ、それはええなあ。うちは大学が遠いからいつも寝坊せんかドキドキしてんで」

彼女があんまりにも羨ましそうに言うので、僕は少し笑った。確かに、彼女はよく寝坊をしていた記憶がある。初めて会ったときも、寝坊してたんだっけ。

「でも、シロちゃん」

すると、不安気に彼女は眉を寄せる。

「うん？」

「それじゃあ、一年前までは、ずっと引越しばっかりやったん？」

「ああ、うん。そうだな」

「それは、大変やったなあ。うちも引越したことがあるけど、荷物運ぶんは、えらいしんどいで」

彼女がそう言うので、僕はちらりと彼女の華奢な二の腕を見る。なるほどな。彼女のそれは何かで支えていないと、今にも折れそうなほど頼りない。

そのことを口にしようかとした時、彼女がふと、こう言った。

「でもな、新しい町に行くのは楽しいな」

「え？」

「だって、何もかもが見たことのない場所なんやで。なんだか知らない場所に冒険しに行くみたいやん」

彼女のその無邪気な笑みに、僕は呆気にとられた気がした。あまりにも自分の感覚とかけ離れた言葉に、つい、気が抜けてしまったのだ。

引越しは、楽しい、か。

いかにも彼女らしい考えだな。

僕は心のなかで、そつと苦笑いをする。

自分には、それは苦痛でしかなかったけれど。

どこに行こうとも僕は同じ空虚な気持ちのままで、新しい家も、町並みも、学校も、人々も、興味なんてなく全部どうでも良かった。どうせ、またすぐ見れなくなってしまふものばかりだ。僕の記憶には思い出がない。同時に未来もない。

僕が楽しいと思ったのは、ただ一つだけ。

椿ちゃんの隣にいる時だけだった。

そう、彼女の傍にいただけで、僕は何もかもが輝いて見えたのだ。好きでもない町のビル群も、通りを歩き過ぎる人々も、野辺にひっそりと咲く可愛らしい花々たちも。

彼女といた頃より良かった場所なんて、どこにもなかった。そうどこにも……。

「な、なあ椿ちゃん」

僕は、ふいに思いついて、問いかけた。どうしても、『それ』を確かめずにはいられなかった。

「うん？」

「僕と離れ離れになって、さ。その、どうだった？」

「どうだったって？」

「なにか、感じなかった？」

「何かって？」

彼女は目を瞬かせて、ぽかんとしている。質問の意図が分からない

いのだろう。

「いや、だからさ、あの……」

さらに言いかけた時。

プルルル。

急な着信音に僕と椿はぎょっとして振り向いた。見ると、椿が持っている僕の携帯電話が震えている。

「シロちゃん、電話みたいやで」

「ああ、うん」

僕はそのタイミングの悪い着信を少々恨みながらも、彼女から携帯を受け取ると、サブディスプレイで誰からの電話なのかを確認した。

『珊瑚先輩』

それは大学の同じ学部の先輩の名前である。一体何の用なのだろう。

「はい、もしもし」

と僕は携帯を耳に当てる。すると、快活な先輩の声がいきなり聞こえてきた。

「おお、たまちゃん。やつほー、元気してるー？」

「ああ、はい、元気ですよ。先輩は如何です？」

「私？ ああ、私もバリバリ元気だぜ。やっぱり若者はこうでなくっちゃいけないよねー」

「そうですね。バリバリ元気なのが若者ですよねー」

僕は適当に先輩に合わせる。これはいつものノリなので、特に意味はない。先輩との軽い挨拶のようなものだ。しかし、ノリが悪いと背中をバシバシ容赦なく叩かれるので、軽い強制でもある。まあ、今は通話中なので先輩から何らかの攻撃を受けるということはないのだけだ。

「そいでよお、今うちら大学のゼミ室にいるわけー、することなくて暇してるとこなんだわ」

先輩の声の向こうで、がやがやと騒がしい音が聞こえる。大方、ゼミ室で大音量の音楽でも流しているのだろう。いつもうるさくするなと教授に注意されるというのに。

「は、はあ……」

「こつちにマツチヨもいるからよお、これから皆でお茶でもしない？ ほら、うち、この前東京まで旅行したって言ったつしょ？」

その土産も無駄にたくさんあるんだわ、これが。賞味期限切れちゃうのも勿体無いからさー、消費しに来てよ。マジお願いだからさー」

「ええと、今から、ですか？」

「あつたりまえじゃん。あれ、なにさー、たまちゃん。これから用事でもあるわけ？ バイトとか？」

「あの、そういうわけじゃないんですが……」

僕はちらりと隣の椿を見る。彼女は意味が分からない感じで首をかしげた。

「ちょっと、野暮用が……」

「あらま、怪しいんだ。たまちゃん、もしかして、これからデートとか？」

先輩の口から出た想定外の言葉に、僕は不覚にも激しく動揺してしまった。

「で、で、で、デートなわけがないですよ！ 絶対無いです！」

緊張のあまり、呂律が回っていない。すると、その異変を先輩は鋭くキャッチする。

「おおっと、ちょいと過剰な反応だねー。珊瑚先輩の心理学、人間は嘘をつくとき、その事柄を必要以上に強調する傾向がある。たまちゃん、さては図星だな」

「いやいや、本当に違いますから。デートなんて僕に彼女がいないことは先輩知ってるでしょ？」

「さあて、どうだか？」

意地悪そうな先輩の声。電話の向こうでにやにやと笑っているのが眼に見えるようだった。

するとそこで、急に慌ただしい音が聞こえたと思うと、別の人物の声がした。

「おい、白路！ い、い、今のは本当なのか？」

暑苦しい男の声である。

「この俺に内緒で抜け駆けなのか？ ええ？ 俺達は彼女いない組。

どんなときだっていつも一緒、運命共同体だって誓い合ったのを忘れたのか！」

僕にはすぐに其の人物が誰なのか分かった。僕と同じ心理学部の学生、松樹祐介。通称、マツチヨである。その名の通り、肩幅の広い、がっちりとした体つきをしていることと、苗字の松とをまつ掛けてそう呼ばれている。

「うるせー。何が運命共同体だ。それはお前が勝手に決めたことだろう？　僕はそんなことを承諾した覚えはないぞ」

しかし、携帯の向こうで、祐介は僕の話の聞いている様子はない。

「くそー、今日はやけ食いだー！」

と勝手に悔しがっている声が聞こえる。

「いいか、白路。お前は勝手にそっちでいちゃいちゃきゃつきゃするといいさ。俺は珊瑚先輩と二人で楽しむんだからなー。絶対ゼミ室にはくるんじゃねえぞ。珊瑚先輩だけは何かあっても渡さねえ！」

「何を勝手に勘違いしてんだ。俺に彼女はいねえって」

「うるせえ、女たらしの話なんて誰が信じるかつーの」

と吐き捨てた後で、急に祐介の声が遠のく。どうしたのかと思うが、珊瑚先輩と話をしているようだ。

「先輩、もうあんな女たらしは放っておいて、俺たちだけで楽しみましょう。ほら、まだ開けてないチョコチップクッキーがあります。おいしそうですよ……え、クッキーはもう飽きた？　じゃ、じゃあ、こっちのポッキーであれ、やります？　ほら、あのゲームですよ。」

両端を、お互いが口にくわえて」

ゴン。

鈍い音が聞こえたと思ったら、そこで、通話は切れていた。訳がわからない。

全く、なんだったのだ、この電話は。

僕は嵐が過ぎ去った後のような呆然とした気持ちになっていた。ともかく、あの様子なら、大学の方へは行かなくてもよさそうだ。ふう、と一安心。

携帯を仕舞って椿の方を見ると、彼女と目が合う。どうやら、会話中、ずっとこちらを見つめていたようだった。

「どうした？」

「ええと、今の電話の相手って、女の人？」

「ああ。僕の大学の先輩で、珊瑚先輩っていうんだ」

それが、どうかしたのか？

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「いや、別に何でもないんやけど……」

と言いつつ、彼女は何かを言いたげだったが、その何かを本人も理解出来ていないようで、困ったように目をキョロキョロさせている。

一体、どうしたのだろう。

まあ、いいか。

「ああ、それにしても、騒がしい先輩たちと話してたら、喉がからからなことを思い出したよ。椿ちゃん、ジュースでも飲む？」

「あ、せやったらうちが買^こつてくるよ」

と、彼女は元気よく立ち上がる。

「何がええ？」

「椿ちゃんが買^こつてくるの？」

「うん。うちもちょうど飲みたかったし。ついでやから」

僕はじゃあ、お言葉に甘えてとコーラを注文して彼女に小銭を二人分渡した。彼女は自分の分は自分で払うと言ったが、僕は買^こつてきてもらうのだから、とそのまま渡した。

「ほんまにええのに」

「いいよ。久しぶりに会ったんだし。これくらい。ああ、それから、自販機ならその辺にあると思うから」

僕は駅の向かい側の通りを指さす。彼女は頷くと「お金、おおきに」と、その方向に駆けて行った。

そうして、十分ほど経った頃だろうか。

僕はその間、彼女のとの思い出を少しずつ自分の中で掘り起こす作業に没頭していたわけであるが、ふと、彼女がずいぶん帰っていないことに気がついた。

まさか、まだ自販機を探しているのだろうか。僕は考える。しかし、いくら自販機の場所を知らないといっても、この町中にいれば一つは見つかるはずだ。いくらなんでも遅すぎる。僕はだんだん不安になった。

もしかすると、実は彼女なんてやっぱり存在しなかったのではな

いか、という疑念がふいに沸き出た。そもそも、こんな場所でこんなにも偶然に再会するなんてこと事態が怪しいのだ。僕は最初から白昼夢でも見ていたのかもしれない。ぶるぶると頭を揺すって、そこではっと思い出し、僕は携帯電話を見る。

いや、大丈夫だ。実在している。

そこには、彼女の電話番号がきちんと登録されていた。

では、なぜ、彼女は帰ってこないのだろう。

まさか、どこかで交通事故にあったとか。可能性はゼロではない。しかし、僕は思い直す。もし、この近所で事故があったなら、間違いなく騒ぎになるはずで、そうなれば僕が気がつかないはずがない。町は至って静かなままである。救急車のサイレンも聞こえない。じゃあ、どうしたというのだろう。

その時、僕は重要な事を思い出した。彼女には、ある致命的とも言える、残念な性質があることを。

そうだ。

「あいつ、方向音痴だった！」

第一章 運命は雨の匂い 6

雨が上がったばかりの街並みは、どこか洗いたての食器のようなさっぱりとした清々しい空気に満ちていました。

遠くの方から、様子を窺うように遠慮がちな蝉の声が聞こえています。水を吸った大地は、ほどよく湿ってぬかるみ、家々の影は雲の隙間から顔を出した太陽によって、その色を次第に濃くしていました。

そんな雨後の街並みの中に、うちは立っていました。

おそらく、もうしばらくすれば、この通りも人の流れができ、活気が生まれることでしょう。いつも通りの、普段通りの、人々の声が行き交う、道になるでしょう。

しかし。

しかし、うちの目には、その人々の流れを妨げかねない巨大な物体が映っていました。あまりの驚きに、片手に持った小銭を取り落としてしまいそうな気分です。

うちは、その道路の真ん中にどっしりと突き刺さったものを見上げて、

「でっかいなー」

と呟きます。

うちの目の前にあるのは、巨大な鉄板で作られた看板でした。

一体、誰がどうやって運んできたのか分かりませんが、軽くビルの二三階分はあろうかというほどの大きな看板です。

それが、どういうわけか、うちの前で両手を広げて通せんぼをするように、がっつりと地面に突き立っているのです。まるで、道を歩いているうちにすっかり巨人たちの住む国に迷いこんでしまった

ような心地でした。

うちは生まれてこの方、こんな珍しい格好の看板を見たことがありません。誰が何をどう思っ、こんな巨大な看板を作ろうなどと考えたのでしょうか。

事情を知っている方にきちんとした説明をして欲しいものです。

そこでうちは少し頭を回転させます。

まあ、これだけ大きいということは、多くの人に見てもらいたい、ということなのでしょう。しかし、それは分かりますが、これは少々大きすぎる気がします。

もしも、通りを曲がってきて、いきなりこんな看板が目の前にあった人してみれば、仰天してひっくり返っても仕方がないほどの巨大さなのです。危うく、うちがそうなるところでした。出来るならば、もっと見る人に優しい看板を立てて欲しいものです。

さて、それはさておき、もう一つ気になったのは、その看板に書いてある文章です。

『冷たい飲み物、自動販売機、こちらにございます』

うちはそれを声に出して確認しつつ読んでみました。うん、間違いありません。上から読んでも下から読んでも、そう書いてあります。そして、文章の最後に、隣の道を指し示す矢印が入っているところを見るに、この看板は自販機の場合を案内するためのものなのです。

どうやら、この看板を立てた人はよっぽど自分が置いた自販機を使ってもらいたかったのでしょう。もしかすると、この地域にしか売っていない、珍しい飲み物を販売しているとも考えられます。この看板はその宣伝用なのです。

うちはそこで、駅のベンチで待っているシロちゃんのことを思い出しました。うちは彼の分の飲み物も買ってくれることを引き受けています。珍しくておいしい飲み物を買ってくれば、きっと彼は手を

叩いて喜ぶでしょう。

うん、絶対に間違いない。

そう思ったうちは、なんの迷いも躊躇いもなく、その看板が示す方向へと、足を進めていました。

軽く、スキップをしながら。

気持ちよく、鼻歌を歌いながら。

シロちゃんが喜ぶ顔を、思い浮かべながら。

うちは、そんな軽い気持ちで、その道を選んでしまっていたのです。

しかし、もしもあの時。

うちがその看板に対して、もう少し疑問に思っていたれば、警戒心を持っていたれば、あんなことにはならなかったかもしれない。

もしも、危険を感じて、大人しく、引き返していれば。

その後に起きる、とんでもない大事件とは関わり会いもなく、旅行を終えていたに違いありません。

けれども、そんなことを今更言っても後の祭り。

うちは結局、その運命の渦に、この時点で飲み込まれていたのです。

そう、暗く、深い、運命の渦に。

第一章 運命は雨の匂い 7

『冷たい飲み物、自動販売機、もうすぐございます』

うちは、弓のように折れ曲がった木の影に隠れるようにして立てられた看板の矢印が向いた方向へと視線を向けます。

「もうすぐ、やな」

と確認するように呟いて、足を踏み出しました。

もう、どれくらい歩いたでしょうか。

うちは、今、街中から離れた森の中を歩いていました。

そう、深い、森の中です。

ちよつと待て、自販機を探してどうして森の中にさまよい込むことがあるのか、という突っ込みは今は無しです。

なぜなら、うちはあの看板さんの言うとおりに、道を進んできただけだからです。

「おっかしいな。もうかなり前からもうすぐ、って書いてあるんやけど」

うちは首をひねりながらも、道に倒れた木を踏み越えます。辺りには、いつの間にか、鬱蒼とした木々が生い茂り、まるで誰かが霧吹きで吹きつけたような濃い霧が漂っています。何とも言えない不気味な感じです。

しっかりと手に握っていた小銭も今や汗で濡れていました。ああもう、早くしてくれへんと小銭を落としてしまいかもしれません。繁みをかき分けて進むと、そこにまた看板があります。木と木の間、その根っこに埋もれるようにして看板が見えました。ああ、こ

れは説明していませんでしたが、この看板を立てた人も途中からは疲れてしまったのか、最初の頃のような巨大な物はなくなり、ほとんどそのスケールが縮んでいました。今ではこんな風に、うちの膝の下ほどの大きさしかありません。

しかし、そこには相変わらずしつかりと、

『もうすぐもうすぐ、自販機はこちらです。ファイト！』

そう書かれています。

うちは軽いため息を尽きます。もうおいしい飲み物など、半分どうでもよくなってきました。とりあえず、冷えたお水が一杯もらえればそれでいい気がします。

しかし、それでも今更やっぱり止めたとは引き返すことは出来ません。

シロちゃんは今頃何をしているでしょう。さすがにうちの帰りが遅くて心配しているでしょうか。

ああ、申し訳ありません。ごめんな、シロちゃん、早くジュース買ってくるから。

そして、しばらく、目の前に現れた石の階段を上った時でした。急に視界が開け、目の前に、何やら建物らしきものが見えました。

「あ、もしかしたら、お店やるか？」

こんな人気のない森の奥に変だな、と思いながらもうちはその期待で駆け寄ってみました。

しかし、近づくにつれ、それがおいしい飲み物を売っているお店ではないことが分かります。

そこは、ただの、古びた、神社の跡でした。

「うわー」

霧の中からうつすらとその姿を表した神社はボロボロで、屋根は崩れかけ、壁は蔦が這い、床は抜けて、そこから草が生い茂るといふ散々な様相を呈していました。

どうやら、ずいぶん長い間放置されていたようでした。おそらく管理する人がいないのでしょう。うちが少し触っただけで、階段の板がぼろりと剥がれ落ちてしまいました。たぶん、もう木の部分が腐って朽ちているのでしょう。

「なんか、おかしなとこに来てもうたなー」

自販機なんて、ないやん。

看板さんに嘘をつかれたのでしょうか。

だとすれば、それは残念なことです。うちは肩を落としてため息を吐きました。うちのこれまでの行動は全て無駄だったのです。

しかし、それだけならまだしも、ここに来て、周囲の霧のせいで方角がすっかり分からなくなっている事に気が付きました。これでは、さっきまでの看板の方向も分かりません。

全く、うちは何をやっているのでしょうか。ここからどうやって帰ったらいいのか、その方法がないのです。

きつと今頃シロちゃんはカンカンに怒っているに違いません。

疲れたせいもあってか、うちは為す術も無くその場に座り込んでしまいました。

「ごめんな、シロちゃん……」

と誰も聞いていない謝罪をします。

と、その時、

ブルルルルル。

携帯の着信音が鳴りました。

「あっ」

気づいて立ち上がり、ポケットから取り出します。そこに表示されていたのは、『シロちゃん』の文字でした。

「せや、さっき番号登録してたんやっただけ」

助かった。

これで、シロちゃんに迎えに来てもらえます。うちはそう思って電話に出ました。

「もしもし、シロちゃん」

「ああ良かった！ 繋がった！ 椿ちゃん、大丈夫かい？」

うちは久しぶりに聞く彼の声に安心しました。

「うん、うちは大丈夫や。ピンピンしてんで」

「そうか、それなら、いいけど……椿ちゃん、今どこにいるんだ？」

「え、ええとな、うちはふるーい神社の前」

「じ、神社だって!？」

電話の向こうでシロちゃんが息を吸って大きく驚きました。

「何だってそんなところにジュースを買いに行ったのさ」

「そ、それはな、ちょっと事情があんねん」

さすがに妙な看板に従う内にたどり着いたなどとは言い難く、うちは言葉を濁しました。

「事情って……と、とにかくそこを動かさないで。僕が迎えに行くから」

「ほんまに？　せやったら嬉しいわ。うち、実は道に迷ってしもうて……」

「だろうと思ったさ」

すると、シロちゃんは全て了解済み、という感じで間髪入れず、そう言いました。

「え？」

「椿ちゃんは昔から方向音痴だったしね。僕がよく探しに行ったよね」

シロちゃんの口調は、まるで昔の記憶を懐かしむように聞こえます。しかし、うちは合点がいきませんでした。

「シロちゃんが、うちを？」

「あれ、覚えてないの？」

「え、ええと……」

うちは、記憶を探りながら口ごもってしまいます。シロちゃんが迷子になったうちを迎えに来てくれたことなどあったでしょうが、分かりません。

しかし、シロちゃんは嘘を言っているようには聞こえませんが、どうやら本当にあったことには間違いなさそうです。

ということは、うちはそんなに大事なことをすっかり忘れてしまったのでしょうか。だとすれば、それはとても申し訳ないことです。うちはそのことを謝ろうとして、ふいに、自分の周囲が明るくなったことに気が付きました。

「あれ？」

誰かがライトを持ってきたのでしょうか。
いえ、違います。

背後を振り返った途端、空を割って、稲妻が地上を目指して落ちてきました。

ドドン！

凄まじい音が響いて、うちは携帯を思わず取り落としてしまいました。目の前で起こったことが信じられず、尻餅をついてしまいました。

ブスブス、と木の焦げた匂いが周囲に満ち、見上げると、神社の屋根から黒い煙が立ち上っていました。

「じ、神社に、雷が……」

うちは衝撃のあまり、それだけしか口にできませんでした。

しかし、本当に驚くのは、うちのその言葉に返事が返ってきたことでした。

「そうだぜ」

「……え？」

「このおれっちが神社の上に落ちてきたのさ」

振り返ると、焦げた神社の屋根の辺り、その上空を、奇妙な姿の鳥が浮かんでいました。

「おれっちの名前はミカヅチ」

黄金色の光に包まれたその鳥は大きく翼をはためかせて言います。

「なあ、お嬢ちゃん。あんだ、おれっちの巫女になってくれよ」

第二章 運命は稲妻のごとく 1

青山椿が迷子になったと聞いても、僕は対して驚かなかった。

いつでも糸の切れた凧のようにふらふらしているあいつなら、いかにも、という感じがしたし、そもそも僕は彼女に対して、さほどの興味がなかったもので、だからどうした、と言い返したくなる気持ちの方が強かった。

しかし、目の前にしゃがみこみ、不安に揺れている教師の目は、僕に助けを求めている。

「ねえ、小賀玉君。本当にあの子のこと見てないの？」

近くに椿がいないと知ったこの女性教師は、先ほどからこの調子で同じ質問を意味もなく繰り返している。僕は首を振るのにも疲れて、いい加減うんざりした。

僕はその日、学校の遠足で、町から離れた小高い山まで来ていた。季節はいつしか暑い夏を越えて、木の葉が色づく秋である。

全校生徒で美しい紅葉の景色を眺めながらのハイキングだった。からりとした快晴の下、野原で弁当を食べ、散々走りまわって遊んだ後、山の中に入り、綺麗な落ち葉やどんぐりを集めて回った。

そして、陽が傾き、いよいよ帰ろうか、という段になり、教師が点呼を取った時、あの青山椿がいないことに気がついたのである。予想外の事態に場は騒然となったのは言うまでもない。一体、どこに行ったのだろう。迷子になったのかな。崖から落ちたのかも。そんな恐怖と興奮に満ちた声が飛び交った。

彼女の友人の中に、直前に林の中で椿を見たという少女がいた。彼女の話では、椿はその友人の少女と共にどんぐり拾いをしてい

たらしいのだが、落ちている数が少ないと思った椿は、もつと奥に行って拾ってくるに進んで行ったきり、姿を見ていないのだと言う。

「僕は見えてませんよ、先生」

苛立った口調で答える。

「大体、僕があいつのことなんて知るわけじゃないじゃないですか。どうしてそんなことを何度も聞くんです？」

すると、そこで混乱に満ちていた教師の瞳が、一瞬だけ元通りになった。

「だって」

と彼女は口を動かす。

「だって、あなたたち『いつも一緒にいる』じゃない」

その当然だと言いたげな言葉に、僕は認めたくない事実を突きつけられた気分になった。

ああ、そうだ。その教師の言うとおりである。

この学校に転校してからというもの、僕の周囲にはなぜかいつもあの青山椿の姿があったのだ。教室にいる時はもちろんのこと、休憩時間に外で遊ぶ時も、社会見学でも、登下校中でさえ、彼女は僕の背中にくっついていた。

もちろん断っておくが、僕が彼女に対して友好の情を持って近づいているわけじゃない。彼女の方が勝手に寄ってくるのだ。

「なあなあ、昨日の夜は何食べた？」

「体育の授業はしんどいなあ」

「宿題忘れたー、ノート見せてくれへん？」

などなど、取るに足らない、どうでもいい事で僕に話しかけてくる。

基本的に僕はそんな彼女に対し、無視を貫き通すのだが、彼女はなぜか、僕に会話を試みることをやめることはなかった。一体何が彼女にその不屈の根気強さを持たせているのか、疑問である。

ともかく、その結果、誠に遺憾なことではあるが、僕と彼女は二人でセットという非常にねじ曲がった常識がクラス内で広まってしまったのである。

僕はそこで口の奥に広がった苦味のようなものを奥歯でかみ殺して、教師の方を見る。彼女は未だ、何か言いたげに僕を見つめたままである。

分かっている。

彼女が僕に望んでいることはもう十分に理解していた。今まではそれに従うことが不服であったために、無視をしていたのだが、このまま教師のプレッシャーを与えられ続けるのも我慢の限界である。

「分かりました、僕が探しに行けばいいんですね」

僕が観念したように了解すると、現金なもので、その女性教師は困った表情からころりと一変、笑顔を見せた。

「あら、ほんと？　すごく助かるわ、小賀玉君」

そして、立ち上がり、

「じゃあ、先生たちは向こうの方をもう一度探してみるから、あなたは向こうをお願い」

と駆け出した。

「期待しないでくださいよ」

僕はため息混じりに彼女の背中に言葉を投げた。

「僕には別に、青山椿リーダーなんてものは内蔵されてないんですから」

すると、その教師は走りだした途中で振り返り、こう言った。

「そうよね、確かにそうなんだけれど。なんだか、あなたなら彼女を見つけれそうなのがしちゃうのよね」

「なんですか、それ」

「うーん、何なのかしらね。あなたと椿ちゃんってどうしてか、二人一緒にいてしっくりくるっていうか、互いに引き合ってるっていうか不思議な感じがするのよ。だから、もしかしたら、って思っちゃうの」

思っちゃうの、って。

僕はその教師の言い方が気に入らなかった。そういう根拠の伴わない曖昧な言い方をするのは頭の悪い人間のすることだと思っていたからだ。

聞くに耐えない、戯れ言だ。

そう、思っていた。

しかし、これまた遺憾なことに、彼女の予感は的中することになる。

この後、僕は林の中に入ってももの数分で、繁みの中から飛び出してきた彼女に会うのである。

第二章 運命は稲妻のごとく 2

「シロちゃん！」

その気の抜けた声と共に、繁みからいきなり誰かに飛びつかれた僕は心臓が口から飛び出すかと思うほど驚いた。

「うわああ！」

と数年来出したこともないみつともない叫び声を上げ、すぐさま背中 of 何かを振り落とそうとする。

何だ？

野犬か？ 猪か？

気が動転し、名前を呼ばれたのも分からず、必死に体を揺さぶった。

すると、

「きゃあ！」

と悲鳴を上げて、その物体が背後に倒れたのが分かった。慌てて振り返る。

そこには、先ほどから行方不明のはずの青山椿の姿があった。地面に尻餅をついて、しかめっ面でこちらを見上げている。

「もう、シロちゃん、ひどいな。うちを振り落とすなんて」

そう言って、恨めしそうに口を尖らせた。しかし、僕はというと、彼女の姿を見て、一瞬硬直した。

こいつは、誰だ？

あおやま、つばきだ。

青山椿、だ。

本当に、僕の前に現れた。

彼女を森の中で探しはじめて、ものの五分も経っていない。僕は先程の教師の言葉を思い出した。

『あなたと椿ちゃんってどうしてか、二人一緒にいて、しっくりくるっていうか、互いに引き合ってるっていうか不思議な感じがするのよ』

おいおい。

本当に僕が探したから、彼女が出てきたのか？

僕は動揺する。しかし、しばらくしてから、ゆっくりと首を振った。

まさか、偶然だろ。そう、これは単なる偶然。

心の中で妙な考えを否定する。彼女と僕がいつも二人でセットなどというふざけた考えは捨てるべきだ。僕の中に青山椿リーダーなんてものがあるわけがない。

そして、そう思うと、入れ替わりに彼女に対する怒りの感情が生まれてきた。

一体彼女はこんな場所で暢気に何をしていたのだろう。集合時間はとくに過ぎている。一人で歩きまわった挙句、勝手に迷子になってくれた彼女は迷惑この上ない。しかもそのせいで、この僕がわざわざ探さなくてはならないとは。

感情のうねりが口元に押しかける。

が、僕はそれにブレーキを掛けた。まずい、彼女の前では感情的になるべきではない。転校初日のことを思い出せ。

あの時は、名前を間違えた彼女について感情的になつてしまい、大声を出してしまったのだった。思えば、僕はあの時から彼女のペー
スに巻き込まれている。そして、それを打開する術を僕は未だに見
つけていない。

そう、彼女の前で感情を晒すことは、圧倒的に不利な状況を産み
出してしまうのだ。

僕は下唇を噛んだ。落ち着け、僕。
と、

「シロ、ちゃん？」

目の前に座り込んでいる彼女は、いつの間にか、不思議そうな目
をしてこちらを見ていた。

「何をばーつとしてんの？」

どうやら、長い間無言だった僕を不審に思っているらしい。僕は
声のトーンをなるべく落として、冷静に答えた。

「なんでもない、ほら、帰るぞ」

「帰る？」

「集合時間はもうとくに過ぎている。皆はお前が迷子になったと
思っ
て探してた」

「迷子？」

彼女は未だきょんとして
いる。

「うちは別に迷子やないけど？」

「いや、迷子だろ。じゃあ、一人で皆の所に戻れたのか？」

彼女はこくと頷く。

「ならちなみに、広場はどっちの方向にある？」

すると、彼女は僕が来た広場の方向よりもさらに森の奥へ向かう道を指さした。駄目だ、こいつには迷子になる天才的な素質があるかもしれない。

「迷子、決定だな」

僕がぼくと、その呆れた口調が気に入らなかったのか、彼女はむっとしたようだった。

「ま、迷子やないもん」

と強がったことを言う。

「迷子だって言ってるだろ。大体、お前の主観で迷っていようといなかろうと集合時間までにみんなの元に戻ってなければ、それは迷子と変わりねえよ。それが客観的事実つてもんだ。いい加減認めろ！」

「迷子やない」

「迷子だ」

「迷子やない」

「迷子だっつーの」

全く、こいつ、意外と頑固な奴だ。いつもはぼわぼわして、何を考えているのかすら分らないというのに。

そう思っている僕は知らず知らずのうちに自分が意固地になり、感情的になっているのに気がつかなかった。それがまずいことだと

いうことを忘れていたのだ。

そして、彼女と迷子だ、迷子じゃない、という口喧嘩を続けるうちに、僕の足はいつしか、落ち葉のたくさん降り積もった滑りやすい道の端を歩いていた。大量に積み重なったそれらが僕の尖った感情を表すように、がさがたと騒がしい音を立てる。

「迷子やない」

「だーから、お前は迷子だ！」

そう言って背後からついてくる彼女を振り返った時だった。
ずるり。

足元の落ち葉の山に、僕の足が滑った。

第二章 運命は稲妻のごとく 3（前書き）

あけましておめでとうございます。ヒロユキでございます。

少々遅めのご挨拶となってしまうましたが、読者の方々、お元気でございましょうか。本年もどうか、この僕の破廉恥妄想ワールドにお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

第二章 運命は稲妻のごとく 3

「シロちゃん！」

瞬間、視界が暗転する。

彼女の叫び声が切れ切れに僕の意識に届く。僕の体はいつも容易くバランスを失っていて、勢いに乗って斜面を転がり出した。

「うわああああ！」

まるで海の渦に飲み込まれたようだった。落ちていく体のあちこちに小石や木の枝が当たるのが分かる。必死に態勢を立てなおそうとするが、勢いは止まらない。

痛い。くそ、なんてこった。

ぐるぐると転がる内によりやく地面が平らになり、僕の体がようやく止まる。気がつけば、仰向けに寝転がった状態になっていた。

僕は大きく息を吸って、吐いた。大した痛みはない。軽く手首などを動かしてみるが、問題なく動く。どうやら、体にそれほど異常はないようだ。

良かった。

すると、

「シロちゃん！」

斜面を下りてくる椿の姿が見えた。

「大丈夫？」

と、駆け寄ってくる。

そんな彼女に僕はそっぽを向いた。無言で。

こんな奴に心配なんてしてもらわなくてもいいと思っていたのである。

僕は誰の手も借りなくとも、一人で立って帰れる。

しかし、半身を起こしてから気がついた。

ここは、どこだ？

周囲を見回す。

分らない。帰り道が、分らない。

これじゃ、僕まで迷子じゃないか。

僕は舌打ちをする。

くそ。全く、こいつと出会ってから、ろくでもないことしか起こらない。

しかし、そんな僕的心情など知らないまま椿は笑顔のままで、僕の傍に座った。

「シロちゃん。怪我してへん？」

無論、僕は返事をしない。

「あ、シロちゃん、膝っ小僧擦りむいてんで？」

痛そうや。

「ほっとけよ」

僕は彼女の方も見ずに言う。

「そんなの勝手に治るさ」

もう、いつそ構わないで欲しかった。

その時の僕の心には、もはや怒りを通り越した多くの疑問が生まれてきていた。

どうしてこいつは、僕の邪魔ばかりするんだ。どうして、僕の心をかき乱すんだ。

どうして、どうして。

もう、放っておいてくれよ。

なんで、いつもあんなに冷たく接してるのに、近づいてくるんだよ。

するとふいに、僕は膝の辺りに何かが触れたのが分かった。鋭い痛みが走る。

「痛っ！」

「ちーっと我慢して、今ばんそうこー貼ってるから」

いらねえよ。

余計なことすんな。

そう言って手を振り払おうとした。

しかし、その瞬間、僕ははっと息を呑んだ。ちらりと垣間見えた彼女の足には、自分よりもたくさんの傷があったのである。おそろく、転がった僕を追ってくる途中で、木の枝などで引っかき傷が出来たのだろっ。赤い血が深く滲み、僕の怪我よりも酷く見える。

「お、おい、絆創膏、まだあるのかよ」

しかし、彼女は笑いながら、首を振った。

「うっん、これ一枚きりや」

「な、なら自分に使えよ。僕の事なんて気にすんな」

「ええんや」

「何が？」

「うちは、ええ。こうしておけば、シロちゃんは痛くないやろ」

それは、そうだけれどよ。

僕は彼女の足のいくつもの傷を見て、無言になった。

どうして、そんなにまでして、僕のことを構うんだ。

「どうして……」

僕は、思わず、声に出していた。

「うん？」

「どうして、僕なんか、相手にするんだよ」

「……」

「僕なんか、一緒にいたってちつとも楽しくないだろ。ちつとも、面白くないだろ。冷たくされて、遠ざけられるだけなのに。なのに、お前は……」

何か、長い間押し込めていた古い感情が溢れ出しそうになって、僕は言葉を止めた。一度、こぼれてしまえば、きつと止められなくなってしまうに違いない。そうなってしまえば、自分の心が今まで必死に守ってきたものが全て壊れていくような気がしたのである。

ふと、気がつくと、椿が僕を見ていた。

じつと、無言で、ただ見ていた。

その、どこまでも真っ直ぐに透き通った瞳で。

「だって、シロちゃん、寂しそうやもん」

そう、ぼつりと言った。

「え？」

「シロちゃんって、いつも強がって、近寄るな、一人でええ、って顔してるけど。うちには判るんや、シロちゃんは本当はとても寂しいんやって」

「……僕が、寂しい？」

彼女は何の屈託もなく笑った。

「うん、うちな、シロちゃんの見えを見てたら判るねん」

「……」

「せやから、うちはな、少しでも傍にいてあげたいねん。それで、ただ、気づかせてあげたかっただけや。シロちゃんの本当の気持ちに」

「僕の本当の、気持ち？」

そんなものが、あるのか？

「せや」

彼女は自信あり気に頷いた。

「本当はシロちゃんだって、誰かと一緒にいたいって思ってるんや、クラスの皆と楽しく過ごしたいって思ってるんや」

「……」

「うちは、そのことにシロちゃんが気がついてくれたら、一番嬉しいねん」

ただ、それだけや。

それで、気づいてくれたら、皆と一緒に笑えばいい。

僕は彼女の言葉を聞きながら、なぜか心が解きほぐされる気持ち

だった。なんと不思議な少女なのだろう、彼女は。

と、

知らず知らずに、無意識のうちに、僕はそつと彼女に手を伸ばしていた。なぜだか、どうしようもなく彼女に触れなくなっていたのである。

ふふ、と彼女は天真爛漫に笑う。

「あ、あ……」

そして、伸ばした僕の手を、彼女はきゅつと両手で包んでくれた。温かく柔らかい感触が僕の手から伝わってくる。

「なあ、シロちゃん。うちに笑ってみせて……」

きつと、きつとあの時からだと思ふ。

僕は、この少女に、生まれて初めての恋をしたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8545w/>

運命なんて怖くない！

2012年1月13日18時58分発行